

## 建窯における「鷓鴣斑」の研究

－ 福建博物院所蔵《黒釉鷓鴣斑盞片「供御」在銘》の想定復元模造を通して －

東京藝術大学大学院 美術研究科博士 後期課程

文化財保存学専攻 保存修復研究領域(工芸)

学籍番号 1317936

張立

### 要旨

本研究は、中国建窯池墩窯跡で採取した宋時代の《黒釉鷓鴣斑盞（供御在銘）》（福建博物院所蔵）の陶片を取り上げ、先行研究をふまえながら生産当初の「黒釉鷓鴣斑盞（供御在銘）」（以下、供御鷓鴣斑と略す）の想定復元模造を制作するものである。そして、模造制作を行うことで得られる原料、釉薬、装飾技法や焼成技法などの実技的な見地と、作品形態の復元による当初の鑑賞形態の考察を通して、新たな知見を示すことを目的とする。

建窯は中国の晩唐から元時代にかけて、福建省水吉鎮の池中村および後井村一帯で活動した窯である。現在までの窯跡発掘発掘により、晩唐から五代にかけての時期は、青釉陶磁と褐色陶磁が主に焼造された。宋時代に入ると黒釉陶磁への需要が高まり、建窯における各窯場の規模は拡大し、主な窯で黒釉を施釉した碗がさかんに生産され、これが建窯の興隆期である。その建窯で焼かれた黒釉碗は中国で「建盞」と呼ばれる。

元時代になって青白磁に転換して衰退に至った。建盞は宋時代に喫茶の茶碗として高い評価を受けていた。また喫茶法が日本に伝わるとともに、喫茶用の建盞は12世紀前期に貿易ルートによって数多く日本に輸入されていた。

建盞の一般的な製作方法はロクロで成形した素地に多量の酸化鉄を含む鉄釉をかけ、丘の斜面を溝状に掘りさらえた龍窯（登り窯）で焼造された。窯の発掘調査から建盞は還元雰囲気焼成されたことが明らかになった。建盞にかけた釉薬は焼成技法、窯内の焼成雰囲気などの条件によって文様のような釉調、斑文が生じる。その多彩な文様のためこれまでの研究者による名称の分類は多種多様で統一されていない。

現在知られている文献資料における建盞の分類の初見は北宋時代の陶穀氏の『清異録』である。そのなかに「閩中では盞を造る。花文は鷓鴣の斑点に類し、試茶家はこれをとうとぶ」という記載がある。また、南宋時代の祝穆氏は『方輿勝覧』の中ですでに建盞を「兔毫」「鷓鴣斑」「毫変」の3種類に分けている。1950年代以来の発掘調査と伝世品の研究により建盞の分類はある程度確定できるが、「鷓鴣斑」は宋時代に一体どんな建盞を指したのかは十分に解明されておらず諸説がある。

ところが、1988年に建窯窯跡が福建省博物館と福建省軽工業研究所による調査団によって発掘調査され、1992年に発掘調査の成果と「黒釉鷓鴣斑盞陶片」の発見が発表された。この陶片は黒釉がかかった碗の下半分が残り、高台内に「供御」の在銘をもつ。見込には円形の白い斑文が配されている。これは人為的に筆などで白釉を黒釉の上に施す装飾技法で焼造されたと推察される。この鷓鴣の胸にある斑文のような文様を装飾する建盞は『方輿勝覧』記載の「鷓鴣斑」である可能性が曾凡氏によって指摘されている。供御鷓鴣斑のように白い斑点が装飾された作例はきわめて少なく、現時点では福建省博物院所蔵の黒釉陶片（約1/6が残存）の一例を知ることができるのみである。ただし、この供御鷓鴣斑の陶片から建窯で一時的にこのタイプの建盞が生産されたことを示していると考えられ、建盞の分類研究から見ても重要性を持つと言える。

供御鷓鴣斑の研究は1994年に中国科学院ケイ酸塩研究所の陳顕求氏らによって陶片の化学組成が明らかにされた。供御鷓鴣斑に関する研究では、現在までのところこれが最も詳細で、その原状に近づける試みにおいて、研究の基礎を固めるものとする。

模造制作では技法研究と合わせて、文献調査と科学調査などの多角的な裏付けと根拠を行う必要があり、作家側にも実技と研究双方の視点を持つことが求められる。

以下のプロセスで想定復元模造を制作する。

#### 1. 調査（熟覧調査・撮影調査）

熟覧調査で陶片の実測図を作成する。実測図によって供御鷓鴣斑の原形を推定でき、白い斑点の装飾特徴を把握できる。

#### 2. 釉薬と素地の調製

陶片の化学分析値から幾つかの釉薬調合比と素地土の種類を決める。現在の制作環境で手に入る原料を用い、釉薬と素地の調製を行う。

#### 3. 装飾技法の焼成実験

陶片から想定される装飾技法でサンプルを作成し、それぞれに焼成実験を行う。

#### 4. 想定復元模造制作

上記の調査および焼成実験から得られた結果に基づき、可能な限り当初の形態に近い形の想定復元模造制作を行う。

想定復元模造制作をしたことで、供御鷓鴣斑の原状の視覚効果について具体的な検証が可能となり、それに用いられている装飾技法・成形技法・焼成技法を解明することができる。また、供御鷓鴣斑の復元研究から得られた情報や経験などをもとに、いままであまり注目されることのなかった「鷓鴣斑」は建盞の研究において新たな価値を付け加えることができると考える。